

「問い」の編集工学

第4回

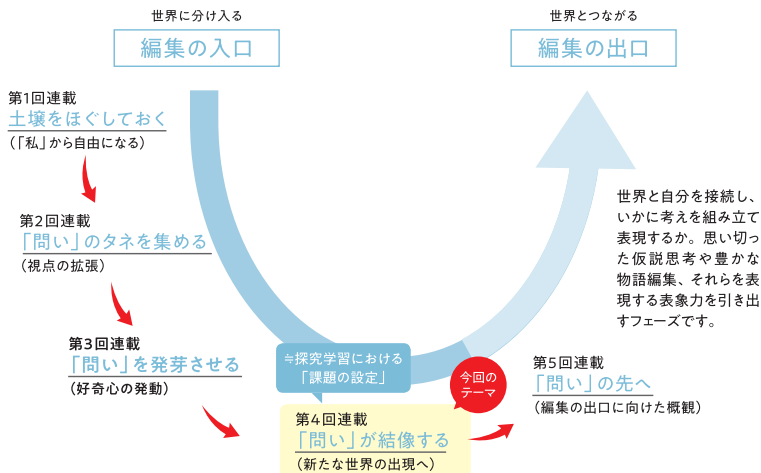
編集工学研究所 安藤昭子

問いが結像する — 新たな世界の出現へ —

探究活動からイノベーションまで、世代や領域にかかわらず今問われる「問う力」。「答え方」ではなく「問い方」を鍛錬するにはどうすればいいのか。第4回となる今回はいよいよ、探究学習における「課題の設定」のステップに当たる、「問い」の結像についてお話しいたします。

「問い」の編集工学全体像

「課題の設定」に至るまでのプロセスに相当



柔らかな土壌に芽吹く問い

外側から与えられる課題ではなく、自分の内側から力強く立ち上がってくる問いにどう向き合うか。小さな違和感やちよつとした疑問をトリガーにして、この先の探究活動につながる深く大きな問いに出合っていくプロセスを、「編集工学」の観点からご案内してきました。

第1回では、「たぐさんの私」を解放する遊びのような演習を通して、「私」という問いの土壌をほぐしました。

第2回では、自分を取り囲む情報にたぐさんの見方を与える「地と図」のからくりについてお話ししました。凝り固まった見方を動かし、極力たぐさんの方向から自分自身や周囲の物事を捉え直すことで、考えてもみなかった違和感や疑問や関心が顔を出し始めます。

ここまでくれば、あとは問いの兆しを捕まえて一気に芽吹かせる段階です。第3回では、本を活用して問いの萌芽を促

す「探究型読書」というメソッドをご紹介します。本と出合い、著者の視点を借り、人と対話をする過程で、自分の中で動き出そうとする好奇心を発見していきます。「探究型読書」の最後に導かれる「最も心を掴まれた問い」が、「私」という土壌に根をはろうとする「問いの芽」に当たります。

「問いの芽」から世界を捉える

ただ、芽吹いたばかりの問いは、どこもなく貧弱で、確信に欠け、心もとないことでしょう。「本当に問う価値のある問いなのか」「これを問うところで何になるのか」、そんな疑念が頭をよぎるかもしれません。まだ「問いの芽」と自分の内面がしっかりとつながっていない状態です。

その心もとなさは、いざれ分け入っていく探究の道の、まさに入り口にたどり着いたということでもあります。ここで止まってしまうと、もう一歩踏ん張って、まだ見ぬ世界に進んでみましょう。まっさ

らな目で「問いの芽」と向き合っていくなかで、「半信半疑」が何かしらの「確信」に変わる瞬間が訪れるはずです。

「アンラーン」と「そもそも思考」

何かを「まっさらな目」で見るためには、そのことを一度「アンラーン」する必要があります。「アンラーン」とは、ある事象に対してすでに身につけた知識や見方を保留して、新たな目で捉え直す試みです。「学びほぐし」と言ったりもします。人間の知性は、何かを新たに身につけるよりも、身につけたことを忘れるほうが苦手です。「アンラーンしよう」と思うだけでは、一度染み付いた「そういうものだ」という常識や思い込みはなかなか退いてくれません。ここでは、「アンラーン」に向かうためのコツをお伝えします。

アンラーンのコツ その1.. 歴史の「はじまり」をたどる

何かを本質的に考えたいときは、一度



安藤 昭子

あんどう・あきこ ● 編集工学研究所・代表取締役社長。出版社で書籍編集や事業開発に従事した後、2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ビジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。2020年には「編集工学」に基づく読書メソッド「探究型読書」を開発し、企業や学校に展開中。著書に、『才能をひらく編集工学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『探究型読書』（クロスメディア・パブリッシング）など。

は「起源をたどる」ことをおすすめします。もともとどこから来たものなのか、どういう経緯で今にいたっているのか。「はじまり」の風景を眺めてみましょう。

私たちは必ずやなんらかの枠組みを通して物事を理解しています。そうした「枠組み（パターン）」は、日常の混乱を避けるうえでの便利な道具である一方で、古い認識に私たちを縛り付けるやっかいな足枷でもあります。この枠組みを取り扱う切り口として、編集工学ではしばしば「略図の原型」という見方で事象を捉えます。「略図の原型」には「ステレオタイプ（典型）」「プロトタイプ（類型）」「アーキタイプ（原型）」の3つがあります。

「～といえば○○」といった表層的な連想からくるステレオタイプ（典型）、○○とはつまり「～と事象の概観を捉えるプロトタイプ（類型）、○○はそもそも～」と起源をたどるアーキタイプ（原型）です。第2回の例で出した「お弁当」を略図

じになるでしょうか。「お弁当」といえば、幕の内（ステレオタイプ・典型）、「お弁当」とはつまり、持ち運べる器に食事を詰めたもの（プロトタイプ・類型）、「お弁当」はそもそも、屋外の労働に出かける際の食事として、古代からさまざまな形で携帯されたもの。また「弁当」という言葉は：（アーキタイプ・原型）。

「略図の原型」は情報を俯瞰的な目で捉え直す際に役立つ型ですが、このなかの「アーキタイプ（原型）」を掘り下げていくことが、ここで言う「起源を見る」ことにあたります。自分のイメージの範囲に閉じずに、さまざまな知識を参照しながらアーキタイプを仮説していきます。

ここでもまた「探究型読書」が役立ちます。あくまで自分の仮説を組み立てるための読書ですから、何を知らたいのか、どんな情報を探しているのか、問いを立てながらざっとスキミングするように目を通して。なるべく情報を立体的にしていくなにも、複数冊を手にとることをおすすめします。1冊10分でも構いません。これはと思う本があれば、腰を据えて読み込んでみるというでしょう。

どんな事象も長い時間を経て意味の旅をしてきているわけですが、私たちはたいてい、今見えている姿や印象でしか物事を捉えています。どこかで定義されたプロトタイプ（類型）や、現在に流通しているステレオタイプ（典型）を超えて、まったく新たな目で物事を捉えるには、そうした認識の枠組みがでる前のアーキ

タイプ（原型）を訪ねるのが手取り早いのです。

アンラーンのコツ その2 「おさなごころ」をたどる

ある事象（お弁当ならお弁当）の社会的な起源をたどっていくだけでも、さまざまな発見がありますし、うまくフィットすれば、すぐにでも行動を起こしそうなような好奇心もむくむくと立ち上がってくるでしょう。

探究活動へと続いていく問いを結像させるうえで、大事なことがもう一つあります。問いにまつわる「個人的な起源」にも目を向けることです。「なんでこんなことが気になるのか」「どうしてそこに違和感を覚えるのか」。自分の内面に耳を澄まし、好奇心の正体に目を凝らしてみよう。

「私の好奇心」のアーキタイプ（原型）を訪ねるつもりで、おさなごころの記憶にまで遡って、まだプロトタイプやステレオタイプで埋め尽くされる前の自分と対話してみてください。そこから今に向かって、問いの起源をさぐっていきます。

無性に好きだったもの、不思議で仕方なかったこと、やけに切なかった思い出…。ほかでもない自分自身の記憶や感覚のなかに、今抱えている問いにつながる原体験があるかもしれません。直接関係してなくても、「そうか、それでこのことが気になっているのか」と思い当たる節があれば、それも大切な緒です。おさなご

ろと五感を開放して問いにまつわる記憶をたどるなかで、色合いや質感を伴ってさまざまな連想が引き出されてくるかもしれません。そうであればきっとその問いは、「あなた」にとって大切な問いであるはずです。もしも何も心が動かなければ、それは今「あなた」が問うべき問いではないのかもしれません。

新たな世界が出現する

どんな知識を集めてきても、それが自分の内面と接続していなければ、その先の探究心を動かす根源的な問いにはなりません。客観的な知識を扱う「評論家」ではなく、内面の知性に突き動かされる「探究者」であるために、「物事」と「私の起源を訪ねる」というプロセスを、両輪で動かしていくことをおすすめします。

根源的な問いをひとつたび携えると、目に映る世界が一変します。見るものすべては探究のヒントとなり、そこかしこに次に取り組みむべき問いが隠れていることに気がつくでしょう。この世界は、どこかのだれかがつくり終えた動かない風景なのではなく、今この瞬間も「あなた」に問われることを待っている、真新しい可能性の塊であることを実感することでしょう。

本連載の
バックナンバー
はこちらから
ご覧いただけます



← 続きます

【“「問い」の結像”演習シート】

「問いの芽」にまつわる風景をアンラーンして、新たな目で問い直す (A3用紙での印刷をおすすめします)

①「問い」の芽： _____

②テーマ・事象： _____
(アンラーンする事柄)

◆プロトタイプ (類型)「～とはつまり」

◆ステレオタイプ (典型)「～と言えば」

③ _____

◆アーキタイプ (原型)「～とはそもそも」

④テーマ・事象のアーキタイプ
(原型・起源)

・歴史・背景を調べる (起源・発生、経緯・変遷)

・語源を調べる

⑥アーキタイプからの連想

・起源をたどるなかで、連想したこと、発見したこと等

⑤自分の内面のアーキタイプ
(原型・起源)

・テーマにまつわる幼いころの思い出

・幼いころ、無性に好きだったもの、不思議で仕方なかったこと、やけに切なかったこと…など

⑦探究のための「問い」： _____

⑧新たに気になること： _____

- ① 探究型読書で導かれた「最も心を掴まれた問い」をベースに置きます。(疑問形のセンテンスで)
- ② その問いの芽の中心となるテーマや事象を抜き出します。これは何についての問いか?
- ③ 「略図的原型」でテーマ・事象を捉え直します。「プロトタイプ」は辞書的な説明。「ステレオタイプ」はそれを象徴する典型的なもの。
例) コンビニのプロトタイプは「日用品の小型スーパーマーケット」、ステレオタイプは「セブン-イレブン、ローソンなど」、といった具合になります。
- ④ 歴史を遡って、テーマ・事象の「はじまり」や今にいたるまでの変遷を見ていきます。語源を調べるのも有効です。
- ⑤ 幼いころの記憶をたどって、なぜこの問いに興味を引かれるのかを探ります。テーマと直接関係する思い出でもいいですし、幼いころのこだわりや原体験から問いへの関連性を見つけてもいいです。
- ⑥ ④と⑤を考えるなかで、①の段階では見えていなかった風景が現れることと思います。印象的なことを自由に書き留めましょう。
- ⑦ 以上のプロセスを経て、改めて探究したい「問い」を言葉にします。じっくり問いにたどり着かなければ、①や②を変えながら、何度でもこのプロセスを通るといいでしょう。
- ⑧ うまく問いが結像すると、新しい世界が目前に広がり、次々と気になることが出てくるはず。自由に書き留めておきましょう。

Q 演習のヒント

探究型読書を通して見えてきた関心事(「問い」の芽)を、“深く探究したい「問い」”として一気に実らせるプロセスです。
「テーマ・事象のアーキタイプ」をたどるには本を存分に活用するといでしょう。一方、「自分の内面のアーキタイプ」は内側にしかありません。内外の知性の両面を動かしながら常識をアンラーンし、新たな目で世界を捉え直します。

アンラーンの威力を知る3冊

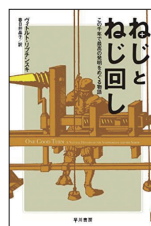
見慣れた風景も些細な事柄も、見方一つ変えるだけで、世界の秘密への入り口になる。アンラーンの達人に探究の道筋を学ぼう。



『文化人類学の思考法』

松村圭一郎、中川 理、石井美保(世界思想社)

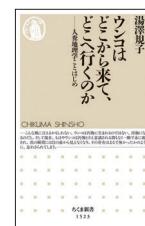
文化人類学者は、未開の文化との比較を通して、西洋近代社会の「あたりまえ」の線引きを根底から問い直してきた。自然と知識、呪術と科学、貨幣と信用など、対のテーマの行き来を通して、「文化人類学的思考の道具」が次々と提供される。アンラーンの達人たちは、何に着眼しどんな方法で思考してきたのか。先入観から自由になるための道具箱。



『ねじとねじ回し この千年で最高の発明をめぐる物語』

ヴィルト・リブチンスキ(ハヤカワ文庫NF)

ありふれた日用品「ねじ」。この小さな部品がこの千年で最高の発明だと著者は言う。ねじがなければ、甲冑も鉄砲も科学も世界の経済発展もないのだ。「ねじとねじ回し」の起源を探っていくなかで、さまざまな道具のはじまりと人類の智慧を見つけていく。見過ごしてしまいうようなもののアーキタイプから現在をアンラーンする、まさに探究のお手本だ。



『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか』

湯澤規子(ちくま新書)

ウンコを見れば、人類と文明が見えてくる。江戸時代は「宝もの」だったウンコが、都市では処理すべき汚物になるのはなぜか。もはやウンコに価値はないのか。なのになぜ子どもはあんなにもウンコが好きなのか。ウンコをめぐる素朴な問いが、文化・産業・環境・経済といった、現代の課題の別の側面を浮き上がらせる。ウンコだって立派な「問いの芽」になる。